

盤珪永琢民衆教化の一考察

矢 沢 圭 子

近世仏教は、幕藩体制のもとで、民衆教化という重大な使命を持ち、江戸時代には各宗派とも大いに民衆教化に力を入れた。従来支配階級と結びつきが深い禅宗でさえも、民衆教化に積極的に取り組んだ禅僧を輩出した。臨済宗の盤珪永琢（元和八年—元禄六年、一六二一—一六九三）は、「不生禪」を唱えたことで知られるが、わかりやすい説法でもって、多くの民衆を教化した。彼は、当時女性には仏になれないと言われていたのに対し、女性も仏になれると説き、女性を救済している点など興味深いものがある。

江戸時代の女性は、封建社会のもとで、家族制度のもとに圧迫されていた。家族制度は、「家」を重視するもので、家長の権力は強大であり、一般に男尊女卑の観念が強いものであった。女性には、儒教の「三従」、「七去」が説かれ、妻は一方的に離縁されることもあり、女性の地位はきわめて低いものであった。また仏教では、本来女性を「五障」、「三従」の身と見ており、仏になりがたいものとされていた。このように女性を罪障の深いものとする仏教の女性観は、近世社会の女性の立場と相俟って、近世仏教においても影響を与えないわけにはいかなかったであろう。

盤珪は、播州網干の竜門寺を中心に、後に帰依する諸侯の領内に建立された寺などにも出向いて説法し、主に西日本で教化した。弟

子の僧は四百人余、尼は二百七十人といわれる。（国師号願の「道徳書」、藤本植重著『盤珪国師の研究』、また「法諱を受け弟子の札を執る者、上、侯伯宰官より、下、士女民隸に至るまで五万余千人」（象山編『盤珪和尚行業記』、原漢文、藤本植重編著『盤珪禪師法語集』、以下『法語集』と略す）の多きにわたった。

盤珪は説法の中で、どのように女性を述べているかというところ、
「女儀と申すものは、何か仮初の事にも、能う腹を立て、迷ひを出かすものでござる。」（『盤珪禪師説法』上 不徹庵本、『法語集』）とある。不生の仏心を決定した時は、「男は男の仏心、女は女の仏心で居て迷はぬが、すなはち仏で、悟り」（『盤珪禪師法語』下 丸亀の巻 竜門寺一冊本、『法語集』）と説くところでは、形には男女の変わりがあつても、仏心には変わりがないことが強調される。盤珪はまた、女性が盤珪の示しに疑いの心がないことをあげて「信心を起さしやれば、えせ賢き男子よりは、正直なる女儀方は、仏に成りますぞや。」（同）と述べているなど、説法聴聞の女性たちに、ことさら注意を促したり、奮気させたりして、女性を意識したきめ細かい教化を行なっているのがうかがわれる。

次に盤珪が、実際に女性を教化した話の概略をあげたい。

一 備中庭瀬の女性への、子のない女性の

成仏についての教化

盤珪が備前で説法した時、説法聴聞にやってきた備中庭瀬の女性は、夫に添ってから子が無いという。先妻の男の子がいるものの、「子のない女は、何ほど後生を願ひましても仏に成りませぬ」といわれていることから、僧たちにたずねたところ、女性は成仏なり難いと言われ、庭瀬の女性は、女性に生まれたことを嘆いて、煩うよ

うになった。彼女は、この地にやってきた盤珪に、「子なき者は仏に成れませぬか」とたずねた。これに対して盤珪は、子のない者の仏になった証拠として、祖師達磨以来相伝えて盤珪自身までをあげ納得せしめた後に次のように説くのであった。

それなれば、子のなき女は、心のとりおき格別でござるか。女とても男とても、人々仏心を備はりました身の上なれば、前に申す通り、鐘の音、太鼓の音を聞くに、仏祖とても、我とても、各々方も、少しも違ひござらぬからは、後生願うて仏に成らぬといふ事はござらぬ。

次いで女性の成仏については、釈迦以来女人成仏が多くあると言い、竜女や中将姫などの例をあげて、「どこに女の身は仏に成らぬといふ事がござるぞいの」と説得した。庭瀬の女性は合点し、日頃の思いが晴れたと述べ、煩っていたのも、気色がよくなった。(『盤珪禪師法語』下 丸亀の巻、『法語集』)

二 盲目の女性への、身障者の成仏についての教化

盲目の女性が、「五体不具にては、仏に成らぬ」と承っているが、もし盲目でも仏になる儀があったら示しを受けたいと言った。これに対して盤珪は次のように説いている。

その様に云ひならばせども、身共が申す不生には、具・不具の差別はござらぬ。盲目にても、生れ付きの仏心には少しも替りはない程に、努々疑ひやるな。

そして、不生の仏心でいれば、今生から成仏したものであると示した後、網干の瞽女が、説法を聴聞して不生にもとづくようになった話をあげている。彼女が不生にもとづくようになったのも、自ら盲目であるがためだと述べていることを引き合いにだし、「能く合点

すれば、目の明らかなる者より、結句、修行の妨げがないものぢや程に、能く合点めされよ」と盤珪は述べている。盲目の女性は、「不具にて、成仏疑い無し」と安堵して、不生の仏心をよく肯ったという。(同)

盤珪はこのほかに、縁づかなかった女性が賽の河原へ行くと言われているのに対し、それであったら自分もそこへ行くので、賽の河原に行くことを心配するなど説いている話(『盤珪禪師説法』上、『法語集』)や竜門寺の大結制の時、諸国から親あるいは子失って嘆きが止まない女性たちが示しを聞きに来たことから、嘆けば仏心を愚痴や畜生に仕替えてしまふと説法した話(『盤珪禪師法語』上 網干の巻、『法語集』)など、女性を教化している話が多い。

以上、江戸時代の女性は、世間から仏になれないと言われることから、社会的に制約を受ける存在であったといえよう。盤珪の民衆教化は、このような女性たちを救済するものであった。それは女性たちの苦を除き、心の安堵をもたらしめるものであったが、社会的には女性たちを何等変えることはなかった。すなわち、女性たちが不生の仏心を肯うことは、封建社会における女性の立場を変えることとは結びつかず、かえって自らの立場を肯定的に受け入れ、そうした立場に徹することを要求される結果を生み、封建社会の強化に通ずる一面を持っていた。しかし、盤珪は女性の立場が非常に弱かった封建社会にあって、女性は仏になれると説き、実際に多くの女性を救済していることは注目すべきものがある。

(大谷大学大学院)